

罨師の助手

R18

2026
年
8
月
23
日

目次

第1話

第2話

第1話

山深い猟場の夜だった。

透はいつものように単独で罾を見回っていた。

親方が昼間に言った。

「今日は大型がかかるかもしれん。気をつけろ」

獣道に仕掛けた罾を、月明かりの下で順に確認する仕事だ。透は20代前半の罾師の助手である。黒髪を短く刈り、山仕事で引き締まった体を黒い作業着が包んでいる。獲物を捕らえる側の仕事だ。縄

を扱い、罨を仕掛け、かかったものを検分する。それが日常だった。

風が冷たい。木々がざわつく。足元の落ち葉は湿っている。透は懷中電灯の代わりに月を頼りに歩いた。腰には職の縄とナイフ。いつもの装備だ。縄の感触を確かめるように、腰に手をやる。仕事の道具だ。

獣道の角を曲がったところで、透は足を止めた。

罨に、影がかかっていた。

大きい。

いつも捕まる中型の獣とは違う。影の輪郭が太い。肩の高さからして、人の倍はある。

「来たか」

透は用心して近づいた。確認のためだ。影の大きさから、イノシシか大型の鹿を想定した。罠の縄の張り具合を確かめる。獲物の状態を検分する準備をした。

影が動いた。

縄が翻る。自分が腰に下げていた職の縄が、自分の手首に巻き付いた。強く、熟練した手つきで締め上げられる。二重に絡められ、指が動かない。縄の感触が自分の仕事道具だとすぐに分かった。獲

物を縛るためのものが、今は自分の手首を締めている。逆転だ。職の道具が、自分を捕らえる道具に変わった。

「あ……？」

体がねじ伏せられた。地面に背中を押しつけられる。冷たい土と、上から覆い被さる熱い体。体重が全体に乗る。逃げ場がない。大きな体が影のように覆い被さる。圧が胸と腹にかかり、息が浅くなる。毛並みが作業着を通してざらりと擦れる感触がある。体温が人とは違う熱さで、作業着の布を通して広がる。

「この罍は俺のものだ。お前も最高の獲物だ」

低い声が耳元に落ちた。黒い毛並みの大型の獣人だった。狼に近い顔。黄色い目。牙が長い。体格は人の倍はある。体温が人とは違う熱さで、作業着越しに伝わってくる。獣の匂いが濃い。鼻腔を満たす。息が首筋にかかるだけで熱い。毛並みが頬のすぐ近くにある。力の差が、圧の重さでわかる。

透は悪態をついた。

「仕事の邪魔をするな。離せ。親方に報告する」

獣人は動かない。大きな手が透の手首の縄を確認し、もう一方の手で体を押さえつける。力の差が明確だった。透の腕は動かない。

腰も浮かない。足を蹴っても、太い腿で挟まれて動けない。全体に圧がかかり、体が沈む。逃げようとしても、圧が動かない。

「報告か。その前に検分する。獲物の検分だ」

手が作業着の裾から入る。熱い。人の手のひらではない熱さだ。腹を撫で上げ、胸に達する。乳首を指で摘ままれて、透の体が跳ねた。

「ん……っ」

（なんだ、これ。熱い。指が太い。仕事中に……こんな反応が）

「敏感だ。いい」

指が乳首を転がす。もう一方の手が背中を押さえ、逃げられないように固定する。透の呼吸が浅くなる。指の腹で強く、弱く、刺激が変わる。硬くなった乳首を摘まみ上げるように動かされる。熱と圧が同時に来る。毛並みの一部が肌に触れる瞬間がある。

「あ……っ、やめろ……。触るな」

「まだ序の口だ」

作業着のボタンが外される。一粒ずつ。胸が露わになる。冷たい夜気と、熱い掌が交互に肌を刺激する。乳首を再び摘ままれ、声が漏れた。

「ひあっ……!!」

（なんで、声が出る。仕事中だ。仕事の邪魔だ。こんな感じるわけない。親方に報告する）

恥ずかしい。動揺した。体が勝手に反応している。乳首が硬くなり、指の熱で疼く。もう一方の乳首も摘ままれ、同時に刺激される。腰がわずかに動く。獣の匂いが胸元に濃く落ちてくる。息が乱れる。

手が下へ移動する。ズボンの紐を解き、下ろされる。腿を無理に開かされる。体格差で抵抗できない。大きな掌が腿の内側をゆつくり撫でる。熱い。毛並みの感触が肌に触れる瞬間がある。指が股間

に達する。陰茎を軽く握り、根元から先へ撫でる。すでに硬くなっている。検分するように、状態を確かめる手つきだ。

「ここも硬くなってる」

「るっせえ……！ 触るな……っ。離せ！」

指がさらに下へ。入り口を指先でなぞる。円を描くように、熱を確認するように。何度もなぞられる。入口が反応して収縮する。獲物の状態を確かめるように、丁寧に、しかし容赦なく。

「ここか。お前は特別だ。最高の獲物だ」

「ひあっ……！ そこは……っ。やめろ」

体が跳ねる。恥ずかしい。感じたくない。なのに熱が腰に集まる。指が押し当てられ、入口がわずかに開く。

（仕事中に……こんな反応するなんて……っ。親方に報告する。報告しなきゃ。体が……）

指が浅く入る。内部の熱と柔らかさを確かめるように動く。一本だけ。ゆっくりと、検分するように出し入れされる。太い指の感触がはっきりわかる。内部の壁をゆっくり擦られる熱が広がる。圧が内部に広がる。獲物を検分する動作そのものだ。

「んあっ……！ あっ……や、め……」

「いい反応だ。締めつけてくる。印を付けて、俺のものにする」

獸人の顔が近づく。首筋に熱い息がかかる。息そのものが熱く、湿っている。獸の匂いが直接鼻に入り、濃くなる。牙が肌に当たる。尖った感触。毛並みが頬に触れる。黒い毛の感触がざらりと肌を掠める。体温が直接伝わる。力の予告のように、牙の先が皮膚に圧力をかけてくる。沈む手前の圧。肌がわずかに凹む。息がかかり続ける。匂いが、牙の近くでさらに濃くなる。

「印を付ける。逃げてでも分かるように」

痛みが走った。牙が首筋の皮膚を浅く、しかし確実に噛む。皮膚が沈む。圧が一点に集中する。力のコントロールがわかる。逃げられない深さで、しかし深く裂かない。血が滲む。所有の印だ。熱が

残る。鋭い痛みが走り、すぐに甘い熱に変わって首筋から肩へ落ちる。下半身まで熱が繋がる。指が同時に動く。浅く、しかし確実に内部を擦る。痛みと快感が混ざる。腰が勝手に浮く。体が跳ねる。内部が収縮する。毛並みが顔に触れ、匂いが血の匂いと混ざる。牙の力が、皮膚を通して伝わる。熱が、血の熱が、内部の熱と重なる。

透は歯を食いしばった。

「やめろ……っ、親方に——痛い……っ、あっ……ひあっ」

拒否の言葉が途切れる。痛みで碎ける。「親方に」が「痛い」に変わり、声が短音に変わる。体が跳ね、内部が締まる。喘ぎが、短く

連続する。

「親方には言わなくていい。お前は俺のものだ」

次は腿の内側だ。柔らかい内側に牙が沈む。大きな手が腿を固定し、圧を加える。また鋭い痛みが走る。柔らかい内側だから熱が早く広がる。甘い疼きに変わる。力のコントロールがわかる。浅く、しかし逃げられない深さで印が一つ、体に刻まれる。血が腿を伝う。冷たい空気に触れて疼く。指が浅く動いたび、痛みの熱が下腹に繋がる。内部が勝手に締まる。体全体が圧と熱に包まれる。毛並みが腿の柔らかい内側に擦れる。匂いが血と混ざる。柔らかい肉だ

から、痛みが鋭く、熱が早く広がる。固定された腿が、動かない。圧が、印を確実にする。

（痛い。なのに……体が熱い。なんで……こんな。仕事の邪魔だ。報告しなきゃ。でも……っ、熱が広がる。内部が……締めつけて。印が……疼く。体が、覚えている）

下半身が硬くなる。恥ずかしい。仕事中に、こんな反応をするなんて。獣人の手がそこに触れた。勃起を確認するように、指が這う。掌全体で包むように確かめる。先を親指で擦る。先から汁が滲んでいる。印の疼きが、その刺激と混ざる。痛みの余波が、快感に変わる。

「反応している。獲物らしくていい。汁も出てる」

「るっせえ……！ 仕事の邪魔だ、離せ！ んっ……ひあっ……
あっ」

悪態を吐く。芯は残っている。だが体は高温の体温に封じられ、力が入らない。喘ぎが漏れそうになる。指が浅く動くたび、内部が締め付けてしまう。乳首を摘まれたまま、股間を扱われる。息が上がる。印の痛みが波のように快感に変わる。体が、勝手に反応する。

「あ……っ、触るな……そこは……ひあっ……んっ……あっ」

手が動く。検分は続く。体格差でねじ伏せられたまま、体温と力で囲まれる。透の呼吸が乱れる。乳首を再び摘ままれ、同時に股間を撫でられ、指が奥へ少し押し込まれそうになる。痛みの印が疼く。毛並みが肌に擦れる。匂いが濃い。圧が全体を支配する。逃げ場がない。

「んっ……！ ひあっ……！ やめ……あっ……んあっ」

（こんなの、感じるわけない。仕事だ。仕事の邪魔だ。でも……熱い。体が……勝手に。印が疼くたびに、熱が落ちる。報告しなきゃ……）

だが体は正直だった。熱が下腹に溜まる。獣人の大きな掌が股間を包むように確認する。指が先端を掠め、根元を締め、リズムを変える。喘ぎが段階を踏む。意味のある拒否から、途切れ、短音へ、無意味な漏れへ。体が跳ねる。恥ずかしい。否認したいのに、腰がわずかに動いてしまう。印の疼きが快感に混ざる。痛みが熱に変わり、熱が腰に落ちる。力の圧が、体温が、毛の感触が、匂いが、すべてを封じる。所有の証が、体に刻まれていく。首筋の印が疼き、腿の印が疼き、両方が熱の波を作る。

獣人は印を確認するように、首筋と腿の傷を指で撫でた。血が指に付く。指を舐めて確認する。黄色い目が透を見下ろす。獣の匂い

が、自分の血の匂いと混ざって鼻に残る。毛並みが揺れる。力の余韻が、体に残る。印の位置を、確かめるように撫でられる。熱が指から蘇る。

「逃げても分かる。この印で俺が追う。次も来る。次はもつと奥まで検分する。お前の中まで」

縄が緩められた。透は体を起こした。首筋と腿が熱い。印が残っている。血が少し乾き始めている。立場は、捕らえる側から捕らえられる側へ書き換えられた。作業着を直そうとする手が震える。印の疼きが、直す動作のたびに走る。熱が残る。血の乾いた感触が、

肌に張り付く。首を動かすだけで、印が動く。腿を閉じると、内側の印が擦れる。

獣人は立ち上がり、森の奥へ消えた。足音はすぐに聞こえなくなった。大きな背中が月明かりに消える。毛並みが最後まで見えた。体温の残熱が肌に残る。匂いが少し残る。力が、まだ体に残っているような錯覚がある。消えた後も、圧の記憶が体に残る。

透は一人、月明かりの下に残された。

印が疼く。体はまだ熱を持っていた。股間の熱が残っている。指が入った感触が残る。太ももを閉じると腿の印が擦れて鋭く疼く。歩くだけで首筋の傷が動く。熱と痛みが交互に来る。血の乾いた感

触が肌に残る。柔らかい内側の傷が、歩くたびに肉を擦って疼く。一歩ごとに、所有の証が体に思い出される。

（次も、来るのか。報告する。する、はずだ。親方に……言わなきゃ。仕事だ。罨の見回りだ。でも、体がまだ……印が疼く。この熱が、消えない。どう報告する。大型がかかった、とだけ言うのか。この印を、どう隠す）

悪態をつきたい。親方に報告する、と言いたい。だが体は正直に反応したままだった。歩くと印が擦れる。首筋の傷に手が触れると、獣人の体温が蘇る。毛並みの感触が、匂いが、力の圧が蘇る。腿の内側の傷が、歩くたびに柔らかい肉を擦って疼く。報告の言葉

が、体の熱に阻まれる。仕事の道具で縛られた感触が、まだ手首に残る。

捕らえる側の助手は、今夜、最高の獲物として印を付けられた。

作業着を直す手が、首筋の傷に触れる。熱い。腿の内側も疼く。

歩くたびに擦れる。足元が少し不安定だった。印が所有の証として、体に残っている。熱が、まだ消えない。立場が、書き換えられた感触が残る。捕らえる側の日常が、捕らえられる側の熱に上書きされた。

透は立ち上がった。

（報告する。する、はずだ。親方に、どう言う。大型がかかった、と。でも、この印は……次も来る、と言われて。体が、覚えて
いる）

だが印が疼くたびに、獣人の言葉が蘇る。

「お前も最高の獲物だ」

透は悪態をついた。声は小さかった。体はまだ熱を持っていた。拒否したいのに、体が覚えている。印の痛みが、奇妙に甘い熱を残している。仕事の道具で縛られ、印を付けられた夜が、体に残っている。首筋の熱が、腿の熱が、股間の残熱が、消えない。

「……次に来たら、絶対に撃退してやる」

山の夜は、
まだ深かった。

第2話

山の昼下がりだった。

透はいつものように罨を見回っていた。

親方が近くの獣道を担当している。透は単独で歩いた。作業着の襟を立て、首筋の印を隠す。腿の内側はズボンで覆っている。印はまだ疼く。歯の跡が残っている。動くたびに疼く。昨日の夜の熱が、まだ体に残っている。報告を先送りしたまま、今日の仕事に出た。親方にばれていない。ばれていないだけだ。

一番目の罨に着く。腰の縄に手をかける。罨の張りを確かめるために、縄を解く。縄の感触が掌に伝わる。その瞬間、首筋の印が鋭く疼いた。腿の内側の印から甘い熱が腰まで落ちた。

（またか。仕事の邪魔だ）

体が熱くなる。下半身がわずかに反応する。恥ずかしい。動揺した。親方にばれたらどうする。報告すべきだった。大型がかかった、と。印を付けられた、と。でもどう言う。次も来る、と言われたことを。

縄を強く握る。印がまた疼く。指が震えた。仕事に支障が出る。集中できない。縄を結び直す動作の途中で、首筋の疼きが腰まで落

ちた。下半身が硬くなる。ズボンの中で調整しようとするが、触るほど疼く。情けない。縄を結び終えても、疼きが残る。手が縄から離れない。

二番目の罨へ歩く。縄が腰に揺れるたびに首筋が疼く。腿を閉じるたびに内側の印が擦れる。下半身が硬くなったまま歩けない。親方の声が聞こえないかと、周囲を見回す。木々の隙間から獣道の方角を確かめる。声はしない。安心はできない。

しゃがむ。腿の内側の印がズボンに強く擦れる。疼きが来る。乳首が作業着の布に触れて硬くなる。体が勝手に反応する。汁が少し

滲んでいる気がする。動揺した。縄を触ろうとして、指が止まる。疼きが増す。仕事の手が止まる。

（こんなの、仕事にならん。報告しなきゃ。でも……）

立ち上がって次へ歩く。足が重い。印が鋭く疼く。下半身が硬いまま。縄を見るだけで体が反応する。手が出せない。歩行のたびに腿の印が擦れる。乳首が布に当たって疼く。恥ずかしい。情けない。

三番目の罠に着く。しゃがむ。印がズボンに強く擦れる。声が出そうになる。歯を食いしばる。乳首が硬く、布に当たって疼く。下半身が完全に硬くなっている。汁がズボンに染みる気配がする。動

揺した。情けない。罌の張りを確かめる手が、印の疼きで震える。

縄を握り直すと、首筋がまた疼く。

（報告する。今すぐ。でもこの体でどう言う。罌師の助手が昼間からこんな反応をしてるなんて。親方に見せられるか。勃起したまま、どう説明する）

風が木々を揺らす。透は足を止めた。

大きな影が、木の陰から現れた。

黒い毛並みの大型の獣人だ。黄色い目。牙。体格は人の倍。体温が近い。熱い。獣の匂いが風に乗る。

「獲物の状態を管理する」

低い声だった。

透は悪態をついた。

「仕事の邪魔をするな。離せ。親方に報告する」

獣人は近づく。大きな手が透の肩に乗る。圧がかかる。逃げられない。体温が作業着越しに広がる。毛並みが頬の近くにある。匂いが濃い。

「報告は後だ。まず管理だ。印の状態を確かめる」

手が作業着の襟に入る。熱い。人の手ではない熱さだ。首筋の印を指で撫でる。疼きが増す。熱が広がる。

「ん……っ」

（やめてくれ。仕事中だ。親方がいるかもしれない。ばれたら終わりだ）

「疼いている。いい反応だ」

指が印を軽く押す。痛みと熱が混ざる。体が跳ねる。獣人はすぐに指を離した。

「まだだ」

触れられなくなった。疼きだけが残る。腰がわずかに動く。欲求が少し溜まる。もどかしい。親方の気配を意識して、歯を食いしやる。印の疼きが、触られなかった分だけ残る。下半身が硬くなったまま、動かない。

次に手が胸へ移動する。作業着のボタンを一粒外す。乳首を指で摘まむ。硬くなっている。転がす。強く、弱く。疼きが来る。

「あっ……」

「敏感だ。管理しやすい」

摘まみ上げるように動かされる。声が漏れそうになる。透は歯を食いしぼる。親方の気配を意識する。声を抑えなければ。もう一方の乳首も摘ままれ、同時に刺激される。腰がわずかに動く。

獣人は指を離した。乳首だけが硬く疼く。空気に触れてさらに反応する。布に当たるとび疼く。もどかしい。恥ずかしい。触れられないまま、疼きが続く。腰がまた動く。

「まだ許さない」

透は息を乱す。

「るっせえ……！　仕事だ、離せ！」

悪態を吐く。芯は残っている。だが体は熱を持っている。乳首が
空気で疼き続ける。下半身が硬いまま、汁が少し増えている。入口
が勝手に脈打つように締め始める。親方の声が聞こえないかと、
目を逸らす。

（報告しなきゃ。でもこの状態で親方にどう言う。印を見せろ、
とでも？　勃起を隠せない。仕事に戻れない。このまま罨を見回れ
るか）

手が下へ移動する。ズボンの紐を緩め、腿の内側に指が入る。印の上を撫でる。疼きが鋭くなる。股間へ落ちる熱。

「ここも疼いている」

「触るな……っ」

指が股間に達する。陰茎を軽く握る。すでに硬くなっている。根元から先へ撫でる。先から透明な液が滲んで、粘って糸を引く。掌全体で包むように確かめる。先走りが粘って糸を引く。

「反応している。いい獲物だ」

撫でるリズムを変える。強く、弱く。熱が溜まる。透の腰がわずかに動く。恥ずかしい。体が勝手に反応している。先走りが増えて

粘る。入口が勝手に脈打つように締め始める。

獣人は手を離した。

「まだだ。管理が先だ」

硬いまま、熱いまま、放置される。先走りが粘ったまま、入口が脈打つように締めつける。欲求がさらに溜まる。指が欲しいのにこない。もどかしい。イきたい。でも拒否する。親方の影を意識して、声を抑え続ける。喉が詰まる。汁がズボンの中で増えている気がする。入口が収縮を始める。触れられないまま、体が反応し続ける。

次に指が入り口へ。指先でなぞる。円を描くように。熱を確認するように。入口が勝手に脈打つように締まる。一度、二度。

「ひあっ……！」

「ここも反応している」

指が浅く押し当てられる。入口がわずかに開く。内部の熱を確かめるように。しかしすぐに引く。

「まだ奥は早い。管理が先だ」

透は息を上げる。体が熱い。印が疼く。乳首が硬いまま。股間が疼く。入り口が熱を持っている。なのに触れられない。おあずけだ。入口が脈打つように収縮を繰り返す。腰が浮きそうになる。恥

ずかしい。動揺した。情けない。イきたい。触ってほしい。でも拒否する。親方の気配で、声を抑え続ける。

（こんなの……仕事の邪魔だ。親方に……報告しなきゃ。でも、この体で……どう説明する。勃起したまま罨を見ろ、なんて。情けない。管理されたまま、仕事に戻るか）

獣人が縄を取り上げる。透の手首に軽く巻き付ける。職の縄だ。仕事の道具が、また自分を縛る。完全に拘束はしない。管理の印として。

「この縄も管理具だ。お前の仕事道具が、お前を管理する」
縄の感触が手首に残る。印の疼きと重なる。体が跳ねる。

乳首を再び摘まむ。転がす。すぐに離す。入り口をなぞる。浅く触れて離す。股間を握って離す。寸止めの反復だ。熱だけが積み上がる。欲求が溜まる。

「んっ……！ ひあっ……！ やめ……あっ」

喘ぎが漏れる。意味のある拒否から、短音へ。親方の影を意識して、声を抑える。喉が詰まる。

「いい声だ。でもまだ許さない。管理が先」

獣人の体温が近い。黒い毛並みが作業着を通してざらりと擦れる。体格差で囲まれる。圧がかかる。逃げ場がない。匂いが濃い。

印を指で押さえ、疼きを増幅させる。同時に乳首を摘まみ、すぐに離す。入り口に指を浅く入れてすぐに抜く。股間を撫でて頂点の手前で止める。

「あ……っ、そこ……っ、やめ……んあっ」

（声を出すな。親方に聞こえる。でも熱い。体が……勝手に。報告できない。この状態で。イきたいのに止められる）

透は悪態を残す。

「仕事の……邪魔だ……！ 次は……撃退してやる……っ」

だが体は正直だった。熱が下腹に溜まる。印の疼きが快感に変わる。寸止めで欲求が深まる。報告が、さらに困難になる。腰が勝手

に動く。入口が脈打つように収縮を繰り返す。先走りが粘って糸を引く。

もう一度、乳首を摘まみ、離す。股間を根元から先へ、汁を増やしてから離す。入り口を二度なぞって離す。欲求がさらに溜まる。腰が勝手に動く。恥ずかしい。動揺した。もどかしい。情けない。イきたい。触ってほしい。でも拒否する。

「まだだ。もっと溜めろ。管理は続く」

さらに、獣人の手が再び動く。印を押さえ、疼きを強める。すぐに離す。乳首を摘まみ、転がし、離す。股間を根元から先へ撫で、

汁を増やし、頂点の手前で止める。入り口に指を浅く入れ、壁を擦り、すぐに抜く。同時に刺激して、全部離す。

「んあっ……！ ひあっ……！ だめ……っ」

体が跳ねる。入口が何度も収縮する。腰が浮く。恥ずかしい。動揺した。もどかしい。イきたい。触ってほしい。でも拒否する。親方に聞こえる。報告できない。硬いまま放置される。汁が増えたまま。乳首が空気で疼き続ける。腰が戻らない。入口が脈打つように収縮を止めない。触れられないまま、欲求だけが溜まる。親方の気配で、歯を食いしばる。喉が詰まる。

「いい。もっと溜めろ。お前の体は俺が管理する」

透は歯を食いしばる。悪態が喉で詰まる。体は正直に反応し続ける。親方の気配を意識して、声を抑え続ける。喉が詰まる。イきたいの止められる。もどかしい。情けない。入口が脈打つように収縮を繰り返す。腰が浮いたまま、戻らない。先走りが粘って糸を引く。

獣人は縄を緩めた。印を一度撫でて、確認するように。牙が首筋の印の近くに当たるが、噛まない。撫でるだけ。毛並みが肌に触れる。

「逃げても分かる。次も管理する。もっと奥まで管理する前に、お前の状態を整える。欲求を溜めろ」

大きな背中が森の奥へ消える。体温の残熱が肌に残る。匂いが残る。印が疼く。乳首が硬いまま。股間が熱いまま。入り口が疼く。入口が脈打つように収縮を繰り返す。腰がわずかに動く。もどかしい。イきたいまま、放置された。

透は立ち上がった。作業着を直す。手が震える。印の疼きが、直す動作のたびに走る。ボタンがうまく閉まらない。乳首が布に当たって疼く。下半身が硬いまま、汁がズボンに染みる気がする。ボタンを一つ留めても、次が留まらない。手が止まる。

（報告する。する、はずだ。でも……この体で、どう言う。仕事に支障が出ている。親方にばれる。ばれたらどうする）

縄を腰に戻す。縄の感触だけで、印が疼く。体が覚えている。管理された熱が、消えない。下半身が硬いまま。手が震える。調整しようとするが、触るほど疼く。情けない。縄を結ぶ動作の途中で、また疼きが来る。手が止まる。

縄を腰に戻した後、透は四番目の罫へ向かう。足が重い。印が疼く。下半身が硬いまま。汁がズボンに染みる気がする。縄を見るだけで体が反応する。手が出せない。歩行のたびに腿の印が擦れる。乳首が布に当たって疼く。

親方の方向を見る。声がする気がした。報告を先送りする。今は無理だ。体が管理されたまま、仕事の日常に戻ろうとして戻れな

い。情けない。動揺した。親方の前に、この状態で立てるか。立てない。

次の罨に近づく。縄に触れようとして、指が止まる。疼きが来る。仕事に戻れない。さらに次の罨へ行こうとして、足が止まる。下半身が硬いまま。汁がズボンに染みる気がする。入口がまだ脈打つように収縮を繰り返している。腰がわずかに動く。もどかしい。

親方の声が遠くで聞こえる気がした。報告を先送りする。今は無理だ。体が管理されたままでは、親方の前に立てない。仕事の道具が、自分を管理する道具になった。印が疼くたびに、それがわかる。

山の昼は、まだ明るかった。

透は悪態をついた。声は小さかった。

「……次に来たら、今度はちゃんと撃退してやる」

だが体は、すでに管理の余熱を抱えていた。印が疼く。乳首が硬いまま。股間が熱いまま。入口が脈打つように収縮を繰り返す。縄を見るだけで、体が反応する。仕事の道具が、管理具になった。

仕事の日常が、所有の管理に侵食され始めていた。報告は、また先送りされた。

ほかの作品はサークルページから

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01071549.html

奥付

作品名 罫師の助手

サークル もふもふといっしょ！

発行日 2026年8月23日

レーティング R18